

訪ねてみませんか

大楠公ゆかりの地

その七

湊川の合戦激戦の地

蓮池



前田吉彦「湊川合戦」

延元元年(三三六)五月二十五日、『湊川の戦い』の火ぶたが切つて落とされ、七百余騎の楠木正成公の隊と三万余騎の新田義貞軍(族の脇屋義助の兵を含む)の官軍に対して、九州方面から進軍してきたのは、五十万騎もの大軍を擁する足利尊氏軍でした(『太平記』による)。

合戦当初、新田軍は和田岬方面で足利軍と対峙していましたが、足利軍の計略に嵌って全軍が東へ移動したため、正成軍は孤立状態となりました。会下山の本陣を出た正成公の軍勢は激しく足利軍を攻め立てます。一時、敵の副将・足利直義(尊氏の弟)を追い詰め、今まさに討とうという際、足利の家臣薬師寺十郎次郎が一騎孤軍奮闘し、直義は命からがら敗走します。その場面となったのが「蓮池の堤」、現在の西代駅周辺です。直義が敗走した須磨の上野(現在の須磨寺のあたり)までの距離は直線距離にして凡そ4km、その激しい戦いの様子が見てとれます。楠木軍は六時間の間に十六度の突撃を敢行しますが、次第に戦死者は増え、刀折れ矢尽き、最終的には七十三騎となり、一族自刃の果てその生涯を終えられました。

激戦地となった蓮池も埋め立てられ、現在この地で昔を偲べるものは、西代蓮池公園内に石碑と案内看板が残るのみです。



昭和初期の蓮池

この湊川の戦いは正成公の御殉節を以て大勢は決します。新田義貞は尚も、生田の森を背にして戦いを続けるも、足利軍の進撃を防ぎ得ず、東灘の処女塚にて殿となり撤退戦を行いました。官軍の敗退によって京都には足利尊氏軍が入り、後醍醐天皇は再び比叡山にお遷りになり、時代は南北朝時代へと突入することとなりました。

この湊川の戦いは古今数多の画家が描いてきました。湊川神社には、前田吉彦(蟻禅)画「湊川合戦図」が収蔵されており、将にこの正成公の突撃により直義が討ち取られんとするシーンを観ることが出来ます。

明治初期の油絵として大変貴重な作品で、戦災・震災による劣化が進んでいましたが、この度、湊川神社創祀の御沙汰一五〇年の嘉節に併せて補修が行われ、往年の姿を取り戻しました。遠近法を取り入れた筆遣いを楽しんで頂けることでしょうか。新春の企画展にて引き続き展示しておりますので是非御覧下さい。

周辺情報

「湊川の戦い」の関連史跡は、当社境内の御殉節地、当時の湊川跡にある「湊川公園」、正成公の本陣跡の「会下山」、和田岬にある「本間重氏遠射址之碑」、足利尊氏を助けた地藏菩薩への報恩の為に建立された「慶雲寺」(須磨区)等、中央区から須磨区に至る途広大な範囲に広がり、戦いの激しさを物語っています。



激戦地の蓮池は元々、奈良時代の僧、行基が作った灌漑用のため池だったという伝説がある。当時は、東西の交通の要所でもあり、源平合戦が度々あった地としても有名。

「蓮池」への交通アクセス  
●山陽電車「西代駅」下車徒歩4分。

# 武士道と楠公精神について

国際共生創生協会  
熊野飛鳥むすびの里  
代表 荒谷 卓

武士道といわれる日本武人の精神規範は、武士という階級ができる遙か以前から存在した。その特徴は、自律した精神規範であるということと、天皇に忠であるということである。

では先ず、自律した精神規範であるという点について説明をする。  
日本の武士道の自律性については、西欧騎士道との比較によって説明した方が分かりやすいであろう。

そもそも騎士道とは、騎士自らが自律的に打ち立てた倫理規範ではなく、貴族や教会が定め、騎士に宣誓させる他律的で服従的な倫理観である。

騎士は、中世西欧において、上層階級である貴族または教会に仕えた従者で、字を読むことも書くこともできない下層階級の労働者から生まれた。そのために騎士が書いた騎士道の書はない。

はじめ騎士は、貴族の城や土地、農民を守るために、貴族から土地を与えられ、戦いに従事した。その後、教会もイスラム勢力や東方教会に対抗するために騎士を雇うようになった。貴族が騎士に求めたのは戦闘能力だけであったが、教会は掟を作つて騎士に服従させた。その掟とは、忠誠、勇氣、礼儀、賢明、信仰、寛大などである。このように教会が騎士に宣誓させた倫理規定がのちに騎士道と

呼ばれるものとなった。たとえば、フランスの騎士道文学の研究者レオン・ゴージェの掲げる『十戒』は、次のようなものである。

- ① 不動の信仰と教会の教えへの服従。
- ② 社会正義の精神的支柱であるべき  
腐敗なき教会擁護の気構え。
- ③ 社会的、経済的弱者への敬意と慈愛。  
また彼らとともに生き、  
彼らを手助けし、擁護する気構え。
- ④ 自らの生活の糧である故国への愛国心。
- ⑤ 共同体の皆とともに生き、苦楽を分かち合うため、敵前からの退却の拒否。
- ⑥ 我らの信仰心と良心を抑圧・滅失しようと

する異教徒に対する不屈の戦い。

⑦封主に対する厳格な服従。

ただし封主に対して負う義務が神に  
対する義務と争わない場合に限る。

⑧真実と誓言に忠実であること。

⑨惜しみなく与えること。

⑩悪の力に対抗して、いついかなる時も、  
どんな場所でも正義を守ること。

のちに貴族と教会のために戦う下層階級  
の騎士の中に、貴族の娘と結婚して上層階  
級に属する騎士も現われてきた。彼らは生  
活が安定しているため戦場には赴かず、戦う  
のはもっぱら下層階級の騎士であった。さら  
に教会は利益を得るために、騎士の称号を  
与える叙任式の費用を何倍にも釣り上げ、  
下層階級の騎士はその費用を用意できなく  
なった。

こうしたことから、騎士の士気は下がり、  
質量ともに騎士は衰退していくことになる。  
最終的に主従関係の主であった貴族と教会  
が精神的に墮落し、革命により権力と権威  
を失うことで、騎士道の倫理規範は正統性

の根拠を失い消滅したのである。

このように、雇用主から与えられた従属  
的あるいは服従的規範が騎士道であった。  
それが故に、革命により雇用主であった君  
主や教会の軍権がなくなるとともに、一瞬に  
して騎士道は歴史から姿を消した。

これに対して、日本の武士道とは、一人が  
自律的に確立する倫理規範であり、教会や  
貴族などのような権力に従属するものでは  
ない。

それは、『楠公壁書』自戒十九條を見れば  
よく分かる。

君の爲に身を捨つるを忠と云ふ、  
親の心に背かずして良く仕ふるを孝と云ふ、  
老いたるを敬ひ士卒を撫育し國民を  
憐れむを仁と云ふ、

一度び諾して變ぜず始終全きを義と云ふ、  
謙退辭讓を禮と云ふ、  
籌策を帷幄の中に運らし勝つことを

千里の外に施すを智と云ふ、  
苟も虚言を構へず信を失ふべからず  
遠慮なき者は必ず近憂あり

大王の 御門の守り

我をおきて また人はあらじ

「我をおきてまた人はあらじ」の「大丈夫」  
の心境である。一切の迷いも不安もない「我」  
人いれば大丈夫」の気概こそ、武士道精神の  
神髄である。

そして、これを現実に体现したのが大楠  
公であった。

北条高時の大逆天誅いたすに仔細なし。  
天下草創の業は武略と知謀の二つ。

勢力では勝つこと得がたいが、  
謀ならばおそるに足らず、合戦の習いにて、  
一端の勝負のみをお気に召されるな。  
正成一人なお生きていと聞こえ召せば、  
聖運ついに開かれるべしと思し召せ

との奏上は、まさしく「我一人いれば大丈夫」  
の気概と全身全霊を賭しての意思を示し  
たものである。また、それを実現できるまで  
の実力を修養練磨し基盤を築き上げてき  
たところに大楠公の一貫した生き様が見ら  
れる。

さて、天皇に忠であるということのもつと

萬事に愁へず屈せず

過を改むるに憚ること勿れ  
邪曲輕薄の人と交るべからず

大酒は失多し。色情は身を失ふ、

心僻むは嫉妬偏執の深きなり

儉約を専とし 奢りを慎み

人の非を見て我身の行を正すべし

我、愚なる故に壁書して慎とするのみ

大楠公には及ばぬにしても、山岡鉄舟の  
「修身式拾足則」や宮本武蔵の「独行道」等、  
およそ武士道と呼ばれるものは全て一人が  
自らを律する道である。日本の武士道が、武  
士が廃されて150年を経た今も存続し、  
世界の人々が価値あるものと認める背景に  
は、自律的に人間としての生き方を内省し、  
自らの修練により倫理道德観を確立した歴  
史と伝統があるからなのだ。

次に、天皇に忠であるということについて  
説明する。

「侍」という言葉の語源は、「日本書紀」に  
記されている「防衛奉護の神勅」にあると考  
える。

も核となるのは、「非理法権天・非は理に勝  
たず、理は法に勝たず、法は権に勝たず、権は  
天に勝たず」の旗印によくあらわされている。

九州で勢力を回復した尊氏が再び京へと  
進軍。正成公は情勢を冷静に判断し戦に勝  
ち目なく後醍醐天皇の京脱出を奏上する  
が受け入れられず、必敗の戦へと出陣する。

正成は自らが確信して奏上した赤心の建策  
に、固執せず、ただ朝廷の命のまま忠順に、  
必死必敗の戦場に赴いた。朝廷の為に勝利  
の現実的戦果をあげる合理的なことよりも  
必死必敗の戦いに生命をささげて敵たる忠  
誠を守る道を選んだ。勅命は一切の賢愚の判  
断に超絶するとの信条である。

畏くも、天皇陛下は、豊葦原の瑞穂の国を  
安国と平けく知ろしめす御位におわし、万  
民の有様をみそなわし、万民の祈りを聞しめ  
し、万民の心を知ろしめしたうえで「みこと  
のり」を渙発するのである。故に、みことのり  
を承りては従うのが日本武人の使命である。  
またこれは、神武天皇の橿原建都のみこと  
のり  
上は即ち乾靈の國を授けたまう

天照大神、天兒屋命・太玉命に勅すらく、  
惟はくは、爾二神  
亦た同じく殿の内に侍ひて  
善く防ぎ護ることを爲せと。  
つまり、天皇及び天皇の政をよく防ぎ護る  
使命を全うするのが侍である。そして、いか  
なる心境でその使命を全うするかといえは、  
大伴家持が万葉集に詠ったことく  
海行かば 水漬く屍 山行かば  
草生す屍  
大王の 辺にこそ死なめ  
かへり見はせじと異立て  
大丈夫の 清きその名を 古よ  
今の現に 流さへる  
祖の子どもそ 大伴と 佐伯の氏は  
人の祖の 立つる異立て 人の子は  
祖の名絶たず  
大君に まつろふものと  
言ひ継げる 言の官そ  
梓弓 手に取り持ちて 剣大刀  
腰に取り佩き  
朝守り 夕の守りに

徳に答え

下は即ち皇孫の正を養ひたまえ、心を弘めむ

然して後に六合を兼ねて以て都を

開き八紘を掩ひて宇と為むこと

亦よからずや

に副い奉る君民一体の国柄でもある。仮にも、天皇のみことのりに従わないというのであれば、我が国の国体に反する朝敵である。

正李公曰く「七生まで唯同じ人間に

生まれ朝敵を滅さばやとこそ存じ候」

正成公曰く「我も斯様に思ふなり

いざさらば同じく生を替えて

此本懐を達せん」

この、七生報国(朝敵滅敵)を祈念して逝った御霊の分霊であることを自覚する者は、当たり前ながらこの意思を現世においても実践するのである。それが、大楠公の御霊を崇敬する者の道であろう。

私は、大楠公の分霊を賜った一人である。

その秋に備え、大楠公がそうしたであろう如く諸々準備万端にしておくことが日々の

を増しついに倒幕が成立する。これにより、後醍醐天皇が隠岐から京に戻り建武の中興となる。

勝利によらず目的を達成するこのような作戦を遂行しえたのは、大楠公の大戦略が故である。

兵を学ぶ法は、心性を悟り庶民を親愛するを上とし、計謀によって学ぶを中とし、戦術をむさぼり習うを下とする。

・将に徳あるときは、敵の兵必ず

我兵となり、敵の民我民となる

・将に智あるときは、敵の謀我謀となし、

敵の利もまた我利となる

・将に勇のあるときは、敵の威我威となり、

敵の能我能となる

この三徳を以て、明らかに方法を明察し、敵の謀に乗じて、却つてこれを覆す、

これ名づけて上將の軍法とす。

中將は、自らその徳を積まず、

その功を求め、

ただ敵の謀を察しその計略を欺き、

我謀を多くして、敵を殺さんことを用いて、

務めである。ではいかにして準備を進めるか。

まずは己自身の心身を修養せねばならない。私の場合、国井善弥先生の鹿島神流をもつて自己修養に努めてきた。

鹿島神流は、顕宗天皇(在位485-

487)の御世、天兒屋根命を先祖とする

鹿島神宮神官國摩真人が、武甕槌命の祓太

刀「鹿島の太刀」を「神妙劍」として顕現し

たものであり、「倒敵破邪の愉悦を好むもの

に非ず、天下御治召し給う大御心に副い奉

るの士を培うに在り。おもうに鹿島神流は、

初において身体を整え、中において心気人

倫を養い、極めては宇宙創元の理を悟るに

至るべし。これ神流の奥義にしてこれ神な

る日本本来の大道なり」とある。また、国

井善弥先生は、「大義を重んじ、包容同化の

精神を培養し、たとえ敵対者に対しても、

日ごろ練磨した術技によって己を全うし、相

手方の非を是正するところに真の武術の意

義が存在する。術技を通じて、包容同化の

精神如実に具現し得たとき、自他共に生存

の実が生ずるので、神武(真武)の下に平和が

敵の生ずるところを知らず、

十度戦いて十度勝と言えども、

未だかつてその太平を知らず、

これ中將の法なり。

下將は、ひとえに戦いを好んで、利を争い、

士民を使うに怒りを以てし、

人を従えるに専ら殺罰を用い、

己の勢いを頼んで敵の智謀を悟らず。

これは、大楠公遺訓の二節である。世界で有名な戦略家として挙げられるのは、クラウゼ

ビッツ、孫子等であるが、彼らと大楠公の思

想が根本的に異なるのは、敵をも味方にす

るという大戦略である。その手段は庶民を

愛するということだ。当時、世界でも最大規

模の軍勢を有する鎌倉幕府を相手にゲリ

ラ戦を戦い抜けた理由は、庶民を味方につ

けたからだ。

私は、自衛隊での30年間、そして明治神宮武

道場至誠館館長としての10年間、我が同志

の育成に努めてきた。そして今年から、「国際

共生創生協会熊野飛鳥むすびの里」を開設

し、日本のみならず世界に同志を育む活動

あり、平和の母体として武道が存在す。心身

を鍛錬し、万難不屈の大丈夫を養い、祖国日

本のため全身全霊を尽くすのみ。」とした。

私が何よりも鹿島神流に惹かれた理由は、

国井家が代々南朝臣下としての立場を貫い

てきたことである。国井家家伝には、南朝三

代長慶天皇を鹿島から八戸までの移動の警

護にあつたつたという記述がみられる。私の

郷里には、長慶天皇の子孫といわれる氏がお

り、長慶沢・長慶金山という地名が残る。

次に、自己の修養とともに、それを共に成し遂げる同志が必要である。私は、特殊作戦を専門とするが、特殊作戦と通常の軍事作戦とは異なり、大規模な軍事作戦によらず、その国の政体を変える作戦である。大楠公は、おそらく世界で最も優れた特殊作戦遂行の軍師である。

大楠公は、圧倒的勢力の幕府軍に対し赤城城そして千早城でのゲリラ戦法で戦略持久戦を戦い貫いた。小城の拠点を数ヶ月持ちこたえている間に、幕府軍おそるに足らずとの風評が全国に及び、反幕府勢力が勢い

に取り掛かる。神武建国の目的である「八紘為宇・天の下に二つの家を創り為そう」という日本人の夢を具現するためである。

この道が、天皇の大御心に副い奉り、大楠公の精神を継承するものと信じ、大丈夫の気概を持つて邁進するものである。



荒谷 卓さん  
(あらや たかし)

昭和34年秋田県出身。昭和53年、秋田県立大館鳳鳴高校卒、昭和57年、東京理科大学、陸上自衛隊に幹部候補生として入隊、普通科連隊、第1空挺団、陸上幕僚幹部、防衛局防衛政策課戦略研究室等に勤務。平成16年特殊作戦群初代群長に就任、平成20年退職(1等陸佐)。ドイツ連邦軍指揮大学及び米国特殊作戦学校に留学。平成21年9月~30年10月、明治神宮武道場至誠館館長、平成30年11月三重県熊野市に「国際共生創成協会 熊野飛鳥むすびの里」設立。著書に「戦うものたちへ」「明治神宮至誠館武道」(共に並木書房)、「自分を強くする動じない力」(三笠書房)がある。「宇宙の屋根の下に共に生きる社会を創る サムライ精神を復活する!」(仮題) (並木書道)より新春出版予定。